

顎関節前方脱臼の一修復法

(解剖学・生理学的見地から手技療法を交えて)

沿岸支部 小成朋志

【はじめに】

顎関節脱臼とは骨頭が円板中央の凹みから逸脱し関節結節を越えてしまう疾患である。比較的女性に多いといわれ、肩関節、肘関節の脱臼に次ぐ頻度で、私たちの業務の中でも遭遇する疾患と思われる。

発生機序として欠伸・抜歯開口時・嘔吐・薬物の経口的服用時などがあげられる。その他、筋の作用だけではなく、関節円板の生理的変形・心理的因子・ホルモンバランスの変化も関係すると言われる。

今回発表する修復法は安全かつ最小限に患者の負担を抑える修復法であると思ひ、症例を踏まえ具体的修復法と考察を発表する。

【適応顎関節脱臼の種類】

前方脱臼の片側・両側および亜脱臼にこの修復法が適応できる。また習慣性脱臼の予防にも期待できる。

【修復法】

患者を仰臥位とし、術者は頭上より患者の全身が見えるように腰掛ける。立位をとると患者に威圧感を与え、より緊張を高めてしまうので注意する。中指と環指の指腹で眼窩下方の頬骨部を、上方から内側、下方、外側へ円を描く様に易しく軽擦する。この場合、筋緊張の程度により、軽擦の時間は異なる。表情筋の弛緩を確認後「アー」と発声させながら筋突起部を軽く顎関節方向に押すと修復される。

時に、筋が弛緩しただけで自然修復されることもある。その他注意として患者は唾液、

を飲み込めない状態なので時々側臥位にし排出させることも大切である。

【症例—1】 70歳、女性、両側脱臼

既往歴：過去5年間に2度片側脱臼

原因：歯科治療中、開口継続中、顎関節部の痛みを我慢していて「ガクッ」という音とともに脱臼。

症状：下顎歯列は前方に突出、外耳孔前方は陥凹。歯科医での修復不可にて医科(整形外科)へ転医。修復を試みるも弾撥性固定により修復不可。医科からの依頼により施術。

修復：患者を仰臥位にてリラックスさせるようにし、頬骨部前面を中指指腹で上方から内側、下方、外側へ円を描く様に軽擦。手技継続20分後患者の表情が和らぎ「コクッ」という修復音とともに自然修復された。

【症例—2】 30歳 女性 左側脱臼

既往歴：なし

原因：欠伸をした時「コクッ」という音と共に閉口不能。

症状：オトガイ部が健側に偏り半開口のまま咀嚼不能、左顎関節に関節窩を触知。

修復：受傷後15分で来院。患者を仰臥位にて、頬骨前面を中指指腹で上方から内側、下方、外側へ円を描く様に5分程度軽擦。表情がリラックスした時、患者に「アー」と発声させ、同時に左右の筋突起を拇指で顎関

節方向に易しく押し整復。

経過：低周波及び頬骨前面の軽擦法 5 分間を後療とし、週に 2 回ペースで 1 ヶ月間通院。包帯固定することなく経過良好。習慣性脱臼への移行もなく 1 年経過した。

指導：毎日朝夕 5 分程度、頬骨部を指腹で軽擦するよう指導。習慣性脱臼への移行もなく 1 年経過した。

【考 察】

顎関節の構造は、下顎頭と浅い側頭骨関節窩から作られ関節円板をもつ。弾性線維に富む関節包は、側頭骨側では非常に範囲が広く、下顎側では細い下顎頭に集合する。全体から見るとロート状に見える。下顎頭と関節円板とは円板中央の凹みに下顎頭が嵌り込む形で緊密に接しているが、側頭骨関節窩と円板との関係はかなり自由になっている。

このことにより下顎の運動は自由で前後方向の水平移動や下顎を大きく捻転させることも可能となる。咬筋、内側翼突筋、側頭筋は下顎骨を挙上し、外側翼突筋は下顎骨を前方移動させ咀嚼筋の他、舌骨上筋群：顎二腹筋・茎突舌骨筋・顎舌骨筋・オトガイ舌骨筋は下顎骨を下に引く開口運動に関与している。咀嚼筋と顎二腹筋、顎舌骨筋は下顎神経(三叉神経の第 3 枝)で支配され、顎二腹筋の一部と茎突舌骨筋は顔面神経で支配されている。関節後方には弾性線維の豊富な静脈叢があり、関節頭の移動に合わせて関節後方の形態変化を受動的に調整している。

顎関節の運動は支点が前後に移動し関節円板の前方には外側翼突筋が停止しており、この筋の作用で開口時に追従する関節円板の生理的な動きが調整されると考えられる。

骨頭が円板から逸脱し関節結節を越えてしまう原因は筋の作用だけでなく、関節円板の生理的作用も関係し顎関節の様々な障害の根本的な要因の一つとして、筋や円板による運

動を潤滑させる為の血液の流れ、即ち円板後方静脈叢へ向かう毛細血管の流れと三叉神経の走行が関与しているものと思われる。

【まとめ】

口内法や口外法は無理に行うと軟部組織や関節窩・関節頭の損傷など二次的損傷の恐れがある。顎関節前方脱臼の発生機序として、関節頭が関節円板の前方肥厚部を越え前方に転位し、咬筋・内、外翼突筋・側頭筋などの緊張により固定される。

この整復法は筋の弛緩により無理なく整復され、時には整復動作をしなくても解剖学的位置に自然整復される。頬骨部を軽擦することによって筋が弛緩する。その理由として円板後方静脈叢へ向かう毛細血管の一部は頬部前面に集まっている。血流を良くすることで円板後方静脈叢を介し、顎関節の運動に関与する筋の弛緩を図ることができる。同時に頬骨部前面から三叉神経第 2 枝が通過する。知覚神経の集まるこの部位を柔らかく刺激することにより、三叉神経を介し運動線維である三叉神経第 3 枝の支配されている咀嚼筋や舌骨上筋の一部に弛緩される要因が考えられる。

洋の東西を共にするなら理論は他にもあるはずですが一部の視点からの発表とする。

引用文献・参考文献

- 1) 柔道整復理論 南江堂
- 2) 頰部の解剖学 (社)岩手県柔道整復師会 肉眼解剖学研究会資料 H18 年
- 3) からだサイエンス